

Е.Г. Спальвин

Хрестоматия разговорного японского языка

Часть 2

**Москва
«Книга по Требованию»**

УДК 81
ББК 81
Е11

Е11 **Е.Г. Спальвин**
Хрестоматия разговорного японского языка: Часть 2 / Е.Г. Спальвин – М.: Книга по Требованию, 2014. – 312 с.

ISBN 978-5-518-04894-2

Хрестоматия разговорного японского языка. Часть 2 / Известия Восточного института. 8-й год издания. 1906-1907 академический год. Том 17.

Известия Восточного института выходят во Владивостоке с 1900 г., несрочными выпусками; редактировались директором Института А. М. Позднеевым, потом и. д. директора Е. Спальвиным.

ISBN 978-5-518-04894-2

© Издание на русском языке, оформление
«YOYO Media», 2014
© Издание на русском языке, оцифровка,
«Книга по Требованию», 2014

Эта книга является репринтом оригинала, который мы создали специально для Вас, используя запатентованные технологии производства репринтных книг и печати по требованию.

Сначала мы отсканировали каждую страницу оригинала этой редкой книги на профессиональном оборудовании. Затем с помощью специально разработанных программ мы произвели очистку изображения от пятен, клякс, перегибов и попытались отбелить и выровнять каждую страницу книги. К сожалению, некоторые страницы нельзя вернуть в изначальное состояние, и если их было трудно читать в оригинале, то даже при цифровой реставрации их невозможно улучшить.

Разумеется, автоматизированная программная обработка репринтных книг – не самое лучшее решение для восстановления текста в его первоизданном виде, однако, наша цель – вернуть читателю точную копию книги, которой может быть несколько веков.

Поэтому мы предупреждаем о возможных погрешностях восстановленного репринтного издания. В издании могут отсутствовать одна или несколько страниц текста, могут встретиться невыводимые пятна и кляксы, надписи на полях или подчеркивания в тексте, нечитаемые фрагменты текста или загибы страниц. Покупать или не покупать подобные издания – решать Вам, мы же делаем все возможное, чтобы редкие и ценные книги, еще недавно утраченные и несправедливо забытые, вновь стали доступными для всех читателей.

О г л а в л е н і є.

I. Хитонуцибанаси (№ 1—100)	1— 21
II. Сіюкону-отогибанаси	22— 70
1. Томое но кон (Осака)	22
2. Каманасигава (Кап)	23
3. Инамуси (Сацума)	24
4. Десиконси (Бунго)	25
5. Докугаме (Хиго)	27
6. Темнуку дзифуку (Симоцуке)	29
7. Кіносита-дайдзінъ (Муцу)	30
8. Дзидзё но тама (Садо)	32
9. Хвєи то сару (Едиго)	34
10. Абуратори (Оми)	36
11. Тануки во о рей (Мусаси)	39
12. Кіюдай-пума (Муцу)	42
13. Сіоя но баба (Овари)	44
14. Мусуме то сару (Синано)	47
15. Конхейдаю (Тотоми)	51
16. Акаи пѣми (Тамба)	55
17. Сєнбо мамнуку (Удзєнъ)	57
18. Оми но мацуяни (Тадзима)	61
19. Аяори но ике (Симоцуке)	64
20. Хикєси-іоме (Ивасиро)	67
III. Нихонъ-отогибанаси	70—98
1. Фуццо-недзуми	70
2. Ошигавара	73
3. Цубаме то коннобори	77
4. Нингіо	80
5. Цякара но каги	87
6. Їорё но таки	94

IV. Нихонъ-мукасибанаси. (Садзанами-сандзинъ)	99—111
1. Бумбуку-цагача	99
2. Ситакири-судзуме	107
3. Ханасака-дзидзи	117
4. Момотаро	129
V. Отосибанаси	145—201
1. Мухицу (Инагя Косанъ)	145
2. Удзиконо (Санъютей Юдза)	152
3. Тамуре но сакэ (Санъютей Енъю)	162
4. Хиторуана (Тацубаная Енкіо)	179
VI. Коданъ *)	205—300
1. Акагаки Гендзю (Санъютей Енъю)	205
2. Инагита Какуносинъ (Када Хакудзанъ)	225
3. Якко Кацуяма (Санъютей Енціо)	267
VII. Котовадза (№ 1—170)	300—303



*) За непявнїемъ жирнаго шрифта съ надстрочными знаками набрано „Коданъ“ вмѣсто „Кōданъ“.

日本語讀本 終

讀

万燈、貧者の一燈。(百三十七) 大事の前の小事。(百三十八) 伊達の藩若。(百三十九) 日羽屋羽角如し。(百四十) 羽衣は、皿までも。(百四十一) 江戸の歎を長崎で討つ。(百四十二) 燕雀なんぞ鴻鵠の志を知らんや。(百四十三) 夫婦喧嘩犬も喰はぬ。(百四十四) 振られて返る果報者。(百四十五) 下戸の建てたる倉はなし。(百四十六) 下卑の智慧は後から。(百四十七) 裸で道中になるものか。(百四十八) 花は櫻に、人は武士。(百四十九) 饑い時に不味いものなし。(百五十) 人は一代、名は末代。(百五十一) 人は見掛によらぬもの。(百五十二) 人の振り見て、我振り直せ。(百五十三) 惚れて通へば、千里も一里。(百五十四) 百日の説法、屁一つ。(百五十五) 一犬虚を吠へて、万犬實を傳ふ。(百五十六) 色男金と力はなかりけり。(百五十七) 石が流れて、木の葉が沈む。(百五十八) 借る時の地藏顔、返す時の閻魔顔。(百五十九) 口は禍の門。(百六十) 強將の許に弱卒なし。(百六十一) 馬子にも衣装。(百六十二) 叫い玉子も切りやうで四角。(百六十三) 耳を掩ふて、鈴を盗む。(百六十四) 無いが意見の總仕舞。(百六十五) 論語讀みの論語知らず。(百六十六) 細工はりうく仕揚を御覽。(百六十七) 去るもの目に疎し。(百六十八) 安い物買へば、鼻が落ちる。(百六十九) 旅は道連れ、世は情。(百七十) 据膳食はぬは男の耻。

間萬事寒翁が馬。(八十四)二兎を逐ふものは一兎を獲ず。(八十五)能ある鷹は爪を隠す。(八十六)喉元過ぎれば、熱さ
 忘れる。(八十七)残り物には福がある。(八十八)鑿と云へば、槌。(八十九)糠に釘。(九十)盗人を捕へて見れば、我子
 なり。(九十一)鬼の留守に洗濯する。(九十二)樂は苦の種、苦は樂の種。(九十三)良藥は口に苦く、諫言は耳に逆ふ。
 (九十四)三十六計逃げるに如かず。(九十五)三人寄れば、文珠の智慧。(九十六)山椒は小粒でもひり、辛い。(九十
 七)急いては、事を仕損ずる。(九十八)梅檀は二葉より香ばしい。(九十九)釋伽に説教。(百)死人に口なし。(百一)
 知らぬが佛。(百二)朱に交じれば、赤くなる。(百三)袖振り合ふも、多少の縁。(百四)損して、徳を取れ。(百五)過
 きたるは及ばる如し。(百六)雀百まで踊を忘れぬ。(百七)大怒は無怒に近し。(百八)玉磨かざれば、光なし。(百九)
 樂しみあれば、苦しみあり。(百十)飛んで火に入る夏の虫。(百十一)虎の威を借る狐。(百十二)鳥は立こども、跡を濁
 さず。(百十三)吉原が明るくなれば、家が闇。(百十四)月に叢雲、花に風。(百十五)馬の耳に風。(百十六)運は天に
 在り、牡丹餅は棚に在り。(百十七)賣言葉に買言葉。(百十八)啼から山た真。(百十九)噂をすれば、影が差す。(百二
 十)我身を拭つて、人の痛を知れ。(百二十一)笑ふ門に福が來たる。(百二十二)焼木杭には火が附き易い。(百二十三)雪
 は豊年の貢。(百二十四)善にも強ければ、惡にも強し。(百二十五)過を改むるに憚ること勿れ。(百二十六)九尺二間に
 戸が一枚。(百二十七)習はぬ教は讀めぬ。(百二十八)惡妻は六十年の不作。(百二十九)明日は明日の風が吹く。(百三十
 一)常るも八卦、當らぬも八卦。(百三十一)頭を隠して、尻を隠さず。(百三十二)常事と越中禪向から外れる。(百三十
 三)跡は野となれ、山となれ。(百三十四)合せ物は離れ物。(百三十五)棒ほど願つて、針ほど叶ふ。(百三十六)長者の

茄子。(二十八)一を聞いて、十を知る。(二十九)一文惜みの百知らず。(三十)一日の事は朝に有り、一年の事は元日に有り。(三十一)一利有れば、一害有り。(三十二)命有つての物種。(三十三)犬も歩けば、棒に當る。(三十四)色に上下の隔なし。(三十五)醫者の不養生。(三十六)石の上にも三年。(三十七)急げば、廻はれ。(三十八)一寸の虫にも五分の魂。(三十九)一寸先は闇。(四十)何時も柳の下に鱒は居らぬ。(四十一)障らぬ神に祟なし。(四十二)言はぬが花。(四十三)蛇の道は蛇が知る。(四十四)地獄の沙汰も金次第。(四十五)地震、雷、火事、親爺。(四十六)十人寄れば、十色。(四十七)壁に耳あり、障子に目あり。(四十八)門松は冥土の旅の一里塚。(四十九)金が飲の世の中。(五十)金持と灰吹とは溜まるほど穢くなる。(五十一)勘定合つて、錢足らず。(五十二)稼ぐに追ひ附く貧乏なし。(五十三)勝つて兜の緒を締める。(五十四)可愛さ餘つて、憎さが百倍。(五十五)蛙の面に水。(五十六)毛を吹いて、傷を求める。(五十七)雞口となるも、牛尾となる勿れ。(五十八)聞いて極樂、見て地獄。(五十九)弘法にも筆の誤。(六十)虎穴に入らざれば、虎兒を獲られず。(六十一)後悔先に立たず。(六十二)故郷へ錦を飾れ。(六十三)轉ばぬ先の杖。(六十四)言葉多ければ、品少なし。(六十五)口も八丁、手も八丁。(六十六)國亂れて、忠臣顯はる。(六十七)苦しい時の神侍み。(六十八)果報は寝て待て。(六十九)光陰人を待たず。(七十)猿も木から落ちる。(七十一)窮鼠却て猫を咬む。(七十二)時かぬ種は生えぬ。(七十三)儘に成らぬは浮世の習ひ。(七十四)目開き千人、盲千人。(七十五)盲の垣覗き。(七十六)身から出た錆。(七十七)門を出づれば、七人の敵あり。(七十八)物も言ひやうて角が立つ。(七十九)門前の小僧習はぬ教を讀む。(八十)七度尋ねて、人を疑へ。(八十一)汝に出でよ、汝に返る。(八十二)成らぬ勘忍するが勘忍。(八十三)人

を繼がせるといふ事に成りました。

三平も天運循環いたして、今は立派なる身の上、勝山花魁を妻といたし、勝山も夫に貞操を盡しまして、楽しい月日を送つたといふ、名妓奴勝山の奇談、是にて結局と致しまする。(三遊亭圓朝)

第七 諺

- (一) 蛇も取らず、蜂も取らず。(二) 開いた口に牡丹餅。(三) 悪銭身に附かず。(四) 雨降つて、地堅まる。(五) 案じるより産むが易い。(六) 有りさうで無いのが金、無さそうで有るのも金。(七) 朝起は三女の徳あり。(八) 馬鹿に附ける藥が無し。(九) 貧乏暇無し。(十) 坊主が憎ければ、袈裟まで憎い。(十一) 塵も積つて、山と成る。(十二) 提灯と釣鐘。(十三) 泥棒を捕まえて、縄を縛ふ。(十四) 椽の下の方持。(十五) 古河に水絶えず。(十六) 鼻毛を抜かれる。(十七) 下手の考え休むに似たり。(十八) 人は死して、名を止め、虎は死して、皮を残す。(十九) 人を見て、法を説け。(二十) 人の噂も七十五日。(二十一) 人を見たら、泥棒と思へ。(二十二) 人を呪へば、穴二つ。(二十三) 骨折り損の草臥儲。(二十四) 佛の光も金次第。(二十五) 百聞は一見に如かず。(二十六) 井の中の蛙大海を知らず。(二十七) 一富士、二鷹、三

い。再び屋敷へ呼び返へされまして、若竹家の後を繼がせまして、二代目若竹折衛と名乗らせましたといふ大層な出世、彼の密書から事々露顯して、家老の柴田淺之進は切腹して相果てた。殿様の廊通ひも止みまして、松平家は茲に無事に納まりました。

さて勝山は一旦鬘を切られたんだから、元の様に頭髮を結ふのは誠に不吉だから、何か工夫は有るまいかと、色々心を碎きまゐた末、結び始めましたのが丁度今日の丸鬘のやうな結髪で、大層勝山花魁に似合ひましたから、又々是が大評判に成りまして、以前に勝る全盛を極はめる事になりました。

其頃藏前には十八大通なんといふ通人が居りまして、是は妙だ、如何にも品が好くて何處となく雅味の有る鬘だ、家内にも結はして見やうなどと、其頃の通人達が妻女は結はせました所から、大層流行致す事に成りまして、今日でも御婦人が御結ひ遊ばす丸鬘といふのは先ざつと此風で御座います。勝山が結ひ初めましたから、是を勝山鬘とも申しまする。

殿様も是を御聞き遊ばまゐりまして、如何にも立派な婦人である、珍しい氣象の女だ、と大層賞美致されまして、茲で何千と金子を以て勝山の身請を遊ばせて、三平と夫婦に致しまして、若竹の家

刀を取り返して、伴左衛門の肩先から忠義の刃ぐつさりと斬下げたから、流石の凶漢も遂々落命に及んだ。

三平悔しいから、ずだぐに伴左衛門を斬りさいなんだ所は全て疔癰持ぐ餅を壊すやうだ。今まで夢中で居た三平、見ると、勝山が助太刀に来て居て、髭が二つに切れて居るから、吃驚り致しましたが、氣を鎮めて、「花魁で御座いましたか。大きに難有う御座います。御蔭で漸く敵が討てました。」もし、御前はん仇を討ちなんまで、無本望で御座んせう。」

「千萬嬉しう御座います。花魁が無けりやあ、斯う早く仕止める事は出来ないの御座います。」と云つて居る内に何しろ廓内の事でありますから、忽ち人が一杯た群集かりました。勝山花魁の評判が大したもので、豪い女だと、江戸中へばつと噂が立つた。

其處で三平は會所へ訴へ出で、芝の御屋敷へも其旨を届け出でます。直様會所からは人を遣つて、向嶋の龍庵の前後を警護いたし、松平家の家來と立會ひの上で、龍庵を家搜しに致しました所、小狐丸の寶劔も彼の密書も出でました。

其處で善惡判明致し、誠に三平は忠義な者であると、主人の仇を討つたんだから、元より罪は無

らりく體を替はして、隙も有らば、逃げんと致すのを、焦つて斬込む三平が小手をば扇もて丁と打つた。

悲しい事には左程劍術の心得の無い三平だから、思はず刀をぼろり大地へ落しまゐる。是をば伴左衛門素早くも拾ひ取り、「已れッ下郎奴。又返り討か、不憫ながら覺悟をしろ。」と刃を振り被つた。

其途端何時の間に現はれたか、一人の女、跣の儘飛び込み來たり、懷劍逆手よ、「不忠者、其處動くなッ」と、健氣けんきも伴左衛門の後より突いて掛かるは、是別人ではありません、三平が心を憫んで、助太刀に出た勝山花魁で御座います。

伴左衛門是を見て、「女の身にて小賢しく助太刀するたあ、面白い。ハッ觀念」と、横に拂つた一月に勝山體を縮めたから、刀かすつて勝山の頭の鬘をばさつくり切りました。

此隙は三平は伴左衛門へむんづとばかりに組み付いたから、たぢくと巡遼たじろく所を、得たりと勝山面へ垂るゝ額髪振り亂しつゝ、刃の下を搔い潜り、ぐざとばかりに伴左衛門が横腹に短刀をば突込んだから、堪らない。あゝとばかりによるくくくと蹠跟ふみかる所を、三平は足を上げて丁と蹴り、

ゑて遣らうとは、誠に難有う存じます。では明朝は何れへか待伏をして居りますから、何うぞ夜の明けぬ内に伴左衛門を此處の家から出すやうにして下さいまし。何分宜しく願ひます」と、堅く約束を致しまして、三平は何れへか立去りました。

其晩に成ると、果して例の丹前大盡轟伴左衛門は又も多くの幫間末社を引連れて、勝山花魁の許へと押し上がり、陽氣に騒ぎまして、寢に就きましたが、何う勝山が取計らつたものでありますか、未だ夜も明け離れず、人影さへも能く見別ける事の出来ませんのに、伴左衛門は松葉屋を立出でました。

五六間來たかと思ふ時分三平物の蔭より様子を見て居ると、何うも伴左衛門に相違ないから、突然現はれ出で、遣り過ごして置いて、後より、「主人の歎、覺悟しろ」と、打つて掛かると、伴左衛門、不意を喰らつて、横に飛び退き、「何者だ」

「誰でもない。若竹の家來三平だ。もう覺悟を極めろ。」と、忠義の刃を振り被つて來る奴をばひらりと體を替はして、一黙れ。下郎の身を以て生意氣なことを爲るな。拙者は然んな事あ知るものか。」「なに、知るも知らぬもあるものか。能くも主人を殺したなあ」と、斬込んで參るのを、ひ